

## 7. 新町で育ちゆく子どもたち

勝 山 玲 子

- I はじめに
- II 教育制度、施設と新町の環境の変遷
- III 子どもと遊び
- IV 親の教育観
- V おわりに

### I は じ め に

子どもが成長していく上で環境が与える影響は大きい。子どもにとっての環境といえば大きく分けて、自然環境、家庭環境、社会環境などが挙げられる。

新町は近辺の田畑、白山麓の山々、獅子吼高原、手取川などの自然環境に囲まれており、また、町の中は昔ながらの商店が今でも建ち並んでいる。戦前戦後の日本全体の社会変化に伴い、そうした自然の町並みは変化しながらその時代時代に生きる子どもたちが育む土壌となってきたに違いない。

本稿では子どもたちの育ち方が時代によってどのように変わってきたかを、まず、教育環境としての学制と新町をめぐる地域環境について記述し、ついで自然、家庭社会などの環境のあらゆる要素を反映していると考えられる遊びという観点から探っていきたい。また、その上で、そうした様々な環境変化の流れの中で親の抱く教育観はどのような特色を持ち、現在に至っているのかを考察していきたい。尚、ここで扱う時代は明治以降から現代に限定し、また、ここでいう子どもとは5、6歳から14、15歳の年齢を指すこととする。

### II 教育制度、施設と新町の環境の変遷

富国強兵や殖産興業の土台が教育にあると考えた明治政府は、1872（明治5）年、学制を發布し小学校4年間の義務教育などの方針を示した。鶴来町（町村合併前。現在の鶴来町鶴来地区）でも1873年に男子の通う鶴来小学校、女子の通う巽小学校が設置された。1885年に巽小学校は廃止され、鶴来小学校と合併したにもかかわらず、小学校3年生までが共学、4年生からはやはり男女別々に教育が施された。1886年の学校令により小学校の義務教育が4年間となる頃、鶴来小学校内には、尋常科と簡易科が併設された。1890年にはさらに義務教育で延長され6年間となり、鶴来小学校では尋常科と高等科が併置されることとなった。後に、尋常小学校と高等小学校に分割され、尋常小学校で義務教育修了後、希望者は高等小学校で2年間の教育を受けるという制度

になった。このように制度は変化したが施設である校舎は、そのまま鶴来小学校が使用され、尋常小学校も高等小学校も同じ敷地内で授業が行われた。

この学校制度は1940（昭和15）年に第2次世界大戦に伴って「国民学校」という名に変わるまで続いた。

戦後、日本国憲法が公布されると、教育基本法が定められ、それまでの軍事主義や極端な国家主義の教育を改め、民主主義を目的とした教育が始まった。また同時に、学校教育法が制定され、小学校制度、中学校制度が発足した。ここで現在の男女共学や6・3・3・4制の新しい学校制度が始まることになる。

先に述べたように、それまで尋常小学校と高等小学校は、同一の敷地に併設されていたため、新たな小学校・中学校も、同一の校舎が使用された。つまり小・中学校が併設のままの開校となったのである。鶴来町では1947年、今の新町傍の陸橋の下に、「鶴来町立鶴来小学校 鶴来町立鶴来中学校」が開校した。1947-49年にかけ、全国的に急ピッチで中学校建設が進む中、鶴来町では1949年に建設が始まった。

ところが当時、旧町村に分かれていた鶴来町内ではまず旧鶴来町に一校、また旧蔵山村旧林村に一校の中学校建設が考えられていた。しかし旧蔵山村・旧林村では生徒数も少なく、また財政も小規模であったため、両旧町村が互いに合同での建設の話を持ちかけ、その結果、「鶴来地区他二ヶ村組合鶴来中学校」が建設された。これが現在の鶴来中学校の前身である。

この後、河内村と分村し鶴来町と合併した旧一ノ宮村の一ノ宮中学校が1957年、旧館畑村の館畑中学校が、1961年にそれぞれ鶴来中学校に合併した。

また、人口増加に伴い鶴来町立鶴来小学校は、南小学校と北小学校に分離し1965年、1966年に、南小学校が朝日小学校、北小学校が明光小学校としてそれぞれ開校し、1982年には明光小学校から広陽小学校が分離して出来た。因みに新町は朝日小学校下である。

次に鶴来周辺の自然環境及び地理的環境についての変化に目を向けてみると、1967年に大日川ダム、1974年に手取川ダムが起工している。このダム建設によりそれまで身近な遊び場であった手取川は、放水による危険をはらんだ場となった。また、手取川ダムの完成とともに白山麓への道路も改修整備が終わるなど、鶴来町を中心として交通施設が発展してきた。

鶴来町が町村合併時に発足した道路総延長に対し現在は約2倍にまで増大した。1950年代から30年間に町道も隅々まで舗装が行き届き、また、山の手バイパス、国道157号線などの県、国道も建設され、上下水道、電気、電話等各種施設の空間施設として多種多様な機能を果たす役割を果たしはじめた。しかし、行政側にとって自動車交通は地域活性化の要因と、定住環境の整備への施策であったが、反面、周辺村落の経済的中心が鶴来町から金沢へ移り、鶴来町商店街が寂びれはじめるという結果も生んだのである。

以上、学校制度の変遷と鶴来町における小学校の合併や分離の状況、また自然環境の変化を述

べてきたが、子ども達は就学の完全な義務化により、「学校」「学級」における集団、仲間意識が形成された、学校の合併分離や自然環境の変化により人間関係及び行動範囲が、拡大したり、縮小したりしてきたと考えられる。さらに、学校制度が定まった後、戦後の混乱期を経た10年余後、高度経済成長が日本人の生活水準を引き上げ、子どもの生活にも大きな影響を及ぼすこととなった。

以下では、こうしたあらゆる変遷が子どもの育ち方に影響を及ぼしたと考えられる時期を1期〈1920年代後半（昭和初期）～1945（昭和20）年ごろ〉（明治からの学校制度の定着期）、2期〈1945年ごろ～1950年ごろ〉（戦後の学校制度の設立、日本の経済の立て直し時期）、3期〈1960年ごろ～現代〉（高度経済成長期以降）に区分し、それぞれの時代の子どもの遊びが、その時代の新町の地域社会や家族などの様子と、どのような関連制をもつかにもふれながら、どんな特徴がみられるかを探っていきたい。

### Ⅲ 子どもと遊び

#### 1期（1920年代後半～1945年ごろ）

この頃の子どもたちは男女がいっしょに遊ぶことがなく、また男女の遊びは、明らかな違いが見られる。男子の遊びは主に木登り、川遊び、学校では陣取りや石けりなどで屋外で遊ぶことが多かった。それに対し女子の遊びは、おはじき、お手玉など、屋内でする遊びが主だった。男女はそれぞれ別の遊びをし、また、共に遊ぶことがないだけでなく、互いに無関心だったようだ。

「女の子らは何して遊んどったかなんて、なんもわからん。学校でも別々やったから、知ることもなかった。」（77歳男性）

「男の子のことは、誰が近所におるかもよく知らなかったねえ。」（74歳女性）との話からも学校生活において男組、女組に分かれていた影響、また、『男女7歳にして席を同じゅうにせず』という言葉どうりの、この時代の社会精神の反映が伺える。

ここで、このころ就学が義務づけられた子どもたちがどのように学習に取り組んだのかについて、少しふれてみたい。

当時は現代のような受験戦争はあるはずもないが、それでもやはり子どもの競争心をうまく学習に取り入れていた面があったようだ。それは、学校の講堂で行われていた算盤大会や運針大会に見られる。勿論算盤大会は、今のように級別なものとは違い、できれば○、できなければ×という単純なものだった。また運針大会とは、尋常小学校2学年から女子のみを対象に行っていたものであり、これも、より長く縫えた者が勝ちとされる大会だった。子どもたちは大会が近づくと、同級生同志で交替で誰かの家に集まり、算盤や運針の練習をした。この練習は、大人や上級生が教えたり面倒を見ることはなく、あくまで同じ年の友達同志で行っていたものだった。

「夜にわいわいし友達らで集まって練習するがは、本当に楽しかったよ」・（74歳女性）と顔を

ほころばせる様子からは、大会に向けての練習とはいえ、友達と集まることでこれも遊びの一環になっていたことが伺える。算盤練習もちろん男子は男子、女子は女子で行っていた。算盤練習に限らず遊びのなかで唯一、男女別々ではあるが、共通して経験したものに「夕涼み」があった。

ここでこの「夕涼み」について考察してみたい。「夕涼み」とは夏の夕方、気温が下がり過ごしやすくなる時間帯に、子どもだけでなく大人も外に出て、所々に集まって雑談などを楽しみながら時を過ごすというものである。現代の子どもたちは、夕飯が終わればクーラーのかかった部屋のなかでテレビやファミコンを楽しんで過ごす。しかしそうした娯楽が無いこの時期の子どもは、夕飯がすんでもまだ薄明るい外の飛び出し、「夕涼み」をすることが遊びだったのである。

子どもたちが「夕涼み」をしに集まってくる場所はだいたい決まっていた。当時、子どもたちがよく集まったH店前の様子について伺った。「当時は商売が盛んでどの店も午後10時ごろまで店をしとったんや。店のおじいちゃんが、よう店前に戸椅子を出して、店番がてら一日中座とった。夕方になると団扇片手に子どもたちが集まって、男の子らは将棋差しをしたり、おじいちゃんと話したりしとったねえ。」(76歳女性)

また、午後10時まで商売をするため、日中は店の仕事に忙しい母親たちはこの「夕涼み」の時間に買物をし、近所の人との会話を楽しんで過ごしていたようだ。中には商売が忙しく大人も子どもも「夕涼み」をする暇など無かったという声もあった。

H店前に限らずこの当時には店前に戸椅子を出し、誰でも腰を掛けて一服していけるようになっていたらしい。店の老人たちは店番という役目を果たしていながら、子どもや近所の人達がやってくると共に語らいで過ごし、老若男女を問わず夕涼みは楽しまれていた。そこには、子どもたちにとっては遊びとしての「夕涼み」が、大人たちにとっては情報交換の、または社交の機会としての意味合いをも含み持っていたように思われる。

また、老人が戸椅子に座って店番をすることがきっかけで人々が楽しんだ「夕涼み」は、商店街であればこそ生じた特有のものと言えるのではないだろうか。

## 2期(1945年ごろ～1960年ごろ)

戦後の子どもの遊びに大きな影響を与えたのは男女共学であったようである。

男子は1期と同様、木登り、川遊びなど屋外で活発に遊んでいた。

また「よく手取川や高橋川に泳ぎにいったし、木登りやらもしたし、とにかく、何でも目に入ったものが、そのまま遊びになったよ。」(60歳女性)の、声をはじめ、この頃から女性も屋外で活発に男女一緒に遊んだという声が多く聞かれた。このように屋外での遊びが多かったことから子どもたちは皆、新町近辺の様子に非常に詳しく「子どもらは皆、どこの家に柿があるとか、よう知っとって、季節が来ると、実を取って食べたりしたわ」(50歳女性)「こどもの時は枇杷やら取って食べたよ」(58歳男性)との声も聞かれた。商店を営む家では玄関や裏口を開けっ放し

にしてあるところが多く、子どもたちはこうした家を通り抜けて通路がわりにして遊び、自然だけでなく商店街も子どもたちにとっては遊びの場となっていた。

とにかくこの時代の遊びに関しては「何でもした。いろんなことをして遊んだ。」との一言をまず第一声で誰もが口にされていた。また、商店街については、この時期1期にくらべ、商店が、戦時中の配給制により商売を辞めて他の町へ移転するなど、他様々な原因で減少し、活気が失われつつあるという変化が見られた。1期に述べた「夕涼み」は、男女一緒に楽しむようになっていたが、この変化により少しずつ姿を消していくこととなった。「夕涼み」がこの時期に消滅した他の要因としては、道路の整備や交通量が激しくなったことが挙げられるだろう。しかし現在でも戸椅子を並べてある店が数軒あり、お客との語らいの道具として残っているようである。

### 3期（1960ごろ～現代）

この時期の子どもたちの遊びに変化をもたらしたのは遊び道具である。人工の玩具が買い与えられ、テレビ等のマスメディアの産物が子どもに多大な影響を与え始め、この時期には1期、2期にみられた、木登りや川遊びなどの自然のなかでの遊びが少なくなってきた。2期の時代に川遊びや木登りをして育った世代にあたる現代の親たちは、自分の子どもの遊びについて、「ダムができてからは、川遊びもできんし、自然のなかで遊ぶことが少なくなって、子どもらの遊びにいく所っていえば公園やね。あとはマンガとかテレビがあるしね。」（50歳女性）と言う。また、新町の子どもが多く通う第一保育所の主任のYさんによると、「子どもたちは、ブロックや積み木で遊んだり、外の出ると、砂遊びや泥んこ遊びをしています。あとJリーグごっこ、オリンピックごっこ、セーラームーンごっこというようなごっこ遊びが多いかな。皆テレビの影響を受けて真似をして遊んでいるみたいですね。」とのことであった。

新町は交通量が激しいとはいえ、ちょっと道を曲がれば、車が入れないような小路が多く、道を駆け回る子どもの姿は現在も見受けられる。しかし実際は屋内でテレビ、ファミコンをするのが子どもたちの遊びの主流であり、屋外で遊ぶ場合は公園に行く子どもが多い。

また、最近では塾や習い事に通う子どもが増加しており、新町の子どもが通う朝日小学校でも全校の3割はスイミングスクールに通っているほどである。こうした習い事や塾通いが子ども達の遊びに変化をもたらす要因となってきたといえる。

その他にも現代の子どもや遊びに影響を与えている要因がある。ここで1期2期にみられた自然のなかでの遊びである川遊びを例に考察してみたい。朝日小学校の先生によれば「川遊びがされなくなったのはダムのせいもあるし、あとは昔は上級生が下級生の面倒をちゃんと見ていて、多少危険があっても心配なかったけど、今は塾があったり、中学生は受験勉強やクラブ活動か忙しくて上級生が遊ぶなくなっているからねえ。それに川にいかなくても学校にプールもあるし、学校は親は誰も子どもを見てない川よりプールにいかせるから。」ということだ。

こうした傾向は川遊びだけに限ったことではなく進学率の高まりによる塾通いの子どもの増加、

またクラブ活動があることなどによる上級生の遊び離れ、施設の完備、学校や親の管理などさまざまな要因によって次第に子どもたちの遊びは自然から遠のいていったのだといえるであろう。

#### IV 親の教育観

以下ではⅢで述べたような「子どもの育ち行く様子」の背後にある家庭環境、主に親の教育観について考察していきたい。

就学意識が戦後完全に人々の中に根づくようになるまでは、商店が多いこともあり、旧鶴来町では、小学校を卒業すると、長男あるいは長女は商店を継ぐ者が多く、その後進学する者は、現代に比べわずかだった。

しかし昭和初期の尋常小学校卒業生就職移動状況をみると、就職者は各年男女平均して約30%にも満たないことが分かる（表-1参照）。よって残りの者は高等小学校へ進学していることになる。また、同時期の尋常高等小学校卒業生就職移動状況からは、1930、1931年度には男女とも就職者は90%以上いるが、1932年度からは就職者が減少し、1933年度には半数近くにまで減っていることがわかる（表-2参照）。残りの者のうちの一部は（特に女子）家事についての可能性もあるが、表-1とあわせ考えると、この時期にかなり進学者が増加していったということがいえるであろう。昭和初期は明治初期に定められた就学が本格的に定着する時期とはいえ、この地域での高等小学校以上の学校への進学率はかなり高かったといえるのではないだろうか。

表-1 尋常小学校卒業生就職移動状況

年代	男			女		
	在	出	計	在	出	計
1930	14.9%	8.5%	23.4%	23.3%	7.0%	30.3%
1931	6.4%	2.1%	8.5%	22.0%	12.0%	34.0%
1932	1.5%	3.1%	4.6%	15.4%	3.8%	19.2%
1933	8.8%	—	8.8%	13.4%	1.9%	15.3%

表-2 尋常高等小学校卒業生就職移動状況

年代	男			女		
	在	出	計	在	出	計
1930	51.0%	46.0%	97.0%	47.8%	43.5%	91.3%
1931	60.0%	31.0%	91.0%	75.0%	16.7%	91.7%
1932	55.0%	32.0%	97.0%	52.4%	23.9%	76.3%
1933	35.0%	25.0%	60.0%	35.7%	21.4%	57.1%

在は在住人員、出は出稼ぎ人員を表す。

資料出所『郷土誌』144～148

また、新町を含む旧鶴来町では1906年（明治39）年から鶴来尋常小学校内に商業補習学校が開校された。これは毎月、3と8の付く日、すなわち月計6日間行われる夜間授業であり、さらに期間を決めた季節教授がなされていたこともあって、商売をしながら仕事に役立つ知識技能を得ることができたようだ。こうしてみると新町を含む鶴来地区では就職後も知識技能を身につけようという学習意欲の高さや、早くからの進学意識の芽生えを伺うことができる。表-1、2にあるように、小学校卒業後出稼ぎにでた者もあり、また、在住者の中にも旧鶴来町内において奉公

に出ている者が含まれていて、子どもが家計の助けとして働きに出ること、また家業を継ぐことは当然のことではあった。しかし、1970年代まではには進学率の急増、高度経済成長の波に乗ることによって、商売を営む家庭でも家業を継ぐものが減ることとなった。

しかし、現代においても、長男又は長男のいない家では長女が家業を継ぐ傾向が全く無くなっているわけではない。

Yさん(50歳女性)によると「私は長女で男の子がいないから、家の仕事を継ぐことを親に、小さい時から言い聞かされて育ったし、自分でも何の疑問も持たんと反発もせんと、そうすることが当然なんやと思って家を継いだんです。」という。この家での商売は現在も受け継がれており、Yさんの長男(26歳)は同じように子どものころから商売を継ぐように言い聞かされて育った。Yさんは「息子は大学へ行かせましたけど、その時も商売と関係のある学部を選ぶように、夫婦して説得しましたよ。今は就職していますけど、いずれ帰ってきて仕事を継げるように同じ業種のところに勤めています。」という。

Yさん宅に限らず、新町で現在も商売を営む家の親たちは、後継者の長男長女が県内外を問わず大学へ進学することや卒業後すぐに家業を継がず別の所にいったん就職することを容認している。しかしそうした進学、就職の選択の裏で、いつかは家業を継ぐという条件を出していることが多い。

このように現代の高学歴社会においても、単なる学歴のためだけではなく商売を継ぐことを目的として進学し、新町に戻り家業を継いでいる若者もわずかながら残っているのではある。

## V お わ り に

新町で育ち行く子どもに焦点を当てるきっかけとなったのは、調査で足を踏み入れた新町のこじんまりとした商店街の和やかな雰囲気と、その周辺の自然が時代を超えた何かを現在もそのままに残しているという感じを受けたことであった。

現代においては、どの地域でも人々の生活はそれほどかわりのないものになっているが、新町では多少なりとも昔ながらの特質が存在し、子どもにも影響を与えているのではないかと考えたのである。特に、新町では昔から三世代同居の家族が多く、家の商売または外での勤めと家事の両立に忙しい母親より、祖母が子育てに携わっている。そのため祖母から孫へと伝わる遊びがあるのではないかと期待したが、実際調査において伝承の遊びというものはなく、家庭生活においては行儀作法、躰けを中心として、祖母は孫の教育する役目を果たす存在であり、孫の遊び相手ではなかったことがわかった。

しかし、そうはいっても「夕涼み」は唯一、孫、または近所の子どもと祖父母が、子育ての域を脱したコミュニケーションをする機会であった。

この「夕涼み」が時代を経るにつれて姿を消したように、教育制度や施設の変遷、経済状況、

道路整備などの環境の変化に伴って、新町の子どもたちの遊びは大きく左右されるものであった。

昭和初期までの子どもたちは、遊ぶことより家計の助けとなって働く大人と同じ重要な労力の提供者だったがその位置を徐々に脱し、まず遊び仲間を学校という環境によって形成していった。戦後に入って、男女共学になると、別々に遊んでいた男女が一緒に遊ぶようになっていった。またそのことによって、屋内での遊びを主としていた、どちらかといえば内向的な女子も外向的になっていき、子どもの遊びは内遊び型から自然のなかで遊ぶ外遊び型へと変わり、同年齢から異年齢も含む仲間遊ぶようになっていった。加えて、昭和初期まで、自分たちの遊び仲間以外の世界にどちらかといえば無関心だった子ども達が、旧町村合併によって、旧の町意識に固執することもなく、それまで関わりが少なかった地区の子どもとの交流または行動範囲を拡大していったのであった。こうしたことからこの時期の新町の子どもたちに、子ども特有の好奇心や順応性の高さの顕在化をみることができる。

しかし、いわゆる高度経済成長以降、産業化と、これに伴う社会構造の著しい変化のなかで、こうした子どもの外向的な遊びの場として自然環境は衰退していった。それに伴い目に入っただけのを遊びにしたという、いわゆる自生的な遊びの場の形成や存続が困難になり、川遊びや木登りといった類の遊びがされなくなったのである。加えて、テレビや各種メディア機器を利用した、遊びの形態の変化は、現代の子どもたちの遊びを再び、外遊び型から内遊び型へと変え、さらには、群で遊ぶことから一人でもできる遊び、創造的な遊びから受け身で模倣的な遊びへと変化させていったのである。

子どもをとりまく環境というものは、あらゆる状況が折り合って生じるものであり、環境によって子どもの仲間や遊びに特徴が生じてくるのだが、実際時代を追って新町の子どもの様子を観てくると、2期の時代にあらゆる面での良き環境が存在し、子どもがのびのびと活発に育っていたという感想を受けた。

しかし、現代の新町は過去と全く違った環境になっているというのではなく、自然環境はまだ相対的には豊かであり、保育所の子どもたちを山や川に散歩に連れて出たり、小学校では近辺の自然を利用した授業に取り組むなどの、子どもを育てる側の姿があった。

現代の日本の子どもをとりまく環境の一般的な傾向として、学歴社会による進学塾、マスメディアによる一方的な影響、物が豊溢化した生活などが挙げられるが、新町の子どもは祖母に育てられ、町内を走り回り、長じては家業を継ぐという何気ない生活の伝統がいまだに息づいている。その伝統が初めに感じた和やかな雰囲気をかもしだし、その空気が子どもを育み続けるのではないだろうか。このことに、新町における子育ての原点を見出すことができるように思われる。